

解 答

□

- 一 a 個体 b 単純 c 群 d 極限 e 現象 ニ ウ
 三 人間の精神的な欲求を満足させるための道具 四 ア 五 イ 六 野鳥
 七 動物の野生状態で生活はどうであったのかを理解し、それを尊重しようとする姿勢。
 ハ ア × イ ○ ウ × エ ○ オ ×

□

- 一 A 腹 B 手 C 口 D 目 E 間 ニ エ
 三 チエのかたまり 四 ア 五 ウ
 六 ネズミの王様だと信じていた銀色の目のネズミが、普通のネズミだと気づき、がっかりして力が抜けたから。
 七 イ、オ

□

- 一 a 格好 b 注 c 費 d 要 e 強固 ニ ウ
 三 自分の経験へれたデータ
 四 大きな情熱を傾けて何かを学び、それを何度も実践に移し、引き出しをどんどん作ること

解 説

□

出典は、今泉吉晴『空中モグラあらわる』。

問二 「動物好き」に二つのタイプの人間がいることを押さえること。同じ動物好きといってもその二つのタイプではななかが違うといっているのである。第一段落は主に「ペット好きの人」が動物と親しい関係を作って楽しむことについて、第二段落は「鳥（野鳥）を見て楽しむ人たちが自分とは独立した別の世界として（＝動物と距離を置いて）楽しむことについて述べている。

問三 第四・第五段落で、もともと人間と対等な関係だったイヌやネコが貴族社会になって愛玩動物＝ペットになったことが書かれていて、第五段落に「社会の歪みに疲れた飼い主の精神状況の慰め手」という表現が出てくるが、これだと二十一字になり、「二十字以内で抜き出して」という条件に合わない。もっと短く抜いて「飼い主の精神状況の慰め手」とすると十二字。数的には「二十字以内」という条件にあてはまるが、出題者の要求する答えが「十二字」だった場合には「十五字以内で抜き出して」という問題にするのが普通。だから、「飼い主の精神状況の慰め手」は短すぎて、出題者が要求している答えではないと判断できる。「二十字以内で」という条件を付けるのは、出題者の考えた答えが十六字以上、二十字以内である場合が多い。よって、これと同じようなことを十六字～二十字で述べている表現はないか、もっと後ろのほうを探してみること。

問四 「ペット以外には……生存の余地がない」とは、逆に言えば、ペットとしてなら、つまり人にかわいがられるためには生存できるということ。

問五 「野生の性質を残しては、ペットとしては困る」ということで、人間の都合によって、たとえば「口輪をはめられたり、うるさいというので外科手術で声帯を取られたり」したペットたちのことである。エは、後半部「野生に戻されてしまった」が不適切。

問七 「大人になってもまだ母ネコからおっぱいをもらっている」のは、「本来の野生状態からいえば、病的な姿」で、「動物をかわいいペットとしか見ないで、本来の生活の構造を無視」した結果である。だから、そうならないようにするには、動物の「本来の生活の構造＝野生状態での生活は一体どうであったのかということ」を理解し、「相手（動物）を尊重する」姿勢が大切で、それが欠けると――線部のようなネコになってしまうのである。

問八 アの「ペットとして飼うのは残酷なこと」「自然界の中にもどしてあげるべき」ということは述べられていない。ウは『忠犬ハチ公』のような人間の従者としてのイヌ」とあるのと矛盾する。オの「捨てられるのもいたしかたない」ということは本文中では述べられていない。イは「たとえば体が小さいのがかわいい……」の段落の、エは、後ろから二番目の段落の内容と合致する。

□

出典は、灰谷健次郎『兎の眼』。

問二 アの「がっかりしている」は、この後銀色の目のネズミを捕らえようとしていることから考えて間違い。同じくイの「純が口からでまかせで言った」も間違い。純はボールを取りにどぶの中にもぐりこんで見たことを言っている。すぐ後に、『ほんまやなあ。あれ、ネズミの親分やで』 キャッチボールどころではなくなった。なんとか生けどりにしたいと、みんな思った」とあることに注意する。子どもたちはどぶの中で、純の言うとおりの銀色の目をしたネズミを見、しかもそれはネズミの親分と思われるほど大きなネズミだったので、ネズミに心奪われ、緊張のため息をつめるようにして見ていたのである。その緊張がほぐれたときの「ため息」で、ウのように「純が嘘つ

きでなかったことにほっとしている」「ため息」ではない。

問三 「こんどは針がねでつりばりを……」の段落に着目すること。子どもたちが工夫をこらして作り直したネズミ捕りのしかけをもう一度どぶの中にしかけたことを、「子どもたちのチエのかたまりは、ふたたび、どぶの中へかえされた」と表現している。

問四 子どもたちは純から狼王ロボの話を聞き、「その興奮は……銀色の目をしたネズミにつながって、胸がどきどきした」わけだが、自分たちもそのような興奮を体験するためには「それ（＝銀色の目のネズミ）は……したたかで、手ごわい相手でなくてはならなかった」。そうでないと張り合いがなくなってしまうからである。子どもたちは銀色の目のネズミを捕まえることに夢中になっているので、イの「ほかの遊び」のことなどは考えていないし、また、エの「大人たちに自分たちのすごさを伝え」るようなことはまったく書かれていない。「銀色の目のネズミが簡単に捕まる」と「狼王ロボの話が嘘になってしまう」はずはないので、ウも不適切。

問五 「熱い視線で」と合うのは、ウの「夢中になって見ている様子」かエの「凝視している様子」であるが、まだ普通のネズミであることには気づいていないので、エの前半の「尊敬する気持ちをなくしながら」は誤り。また、アの「ネズミをよく観察している」というような冷静な気持ちで見ているのではない。

問六 純に続き武男もすわり、「功と四郎も力なくすわった」とあることからわかるように、純も「力なく」腰をおろしたのである。みんなは「からだの力がいっぺんにぬけてしまった」のである。そうなった理由は、「どぶの中では銀色の目玉をしていたのになァ。なんでやる」「あはたれ、暗いところで光があたれば、動物の目は光るようになってんじや」という会話から考えられる。つまり、どぶの中で見たときには銀色の目をしたネズミの王様だ、と思っていたのに、捕まえて外に出して見るとそれは普通のネズミだったのである。そのことに気づき、がっかりして力がぬけてしまい、みんな次々にすわりこんだのである。

問七 アは「仲間にはばかにされていた」が間違い。「仲間は話しかけることで、口数のすくない鉄三をいたわっていた」のである。ウは「何度も失敗した」や「仲間割れをすることが多かった」が誤り。純はみんなをだまして「銀色の目をしたネズミがおる」と言ったわけではなく、暗いどぶの中ではほかの子どもたちにもそのように見えたので、エは不適切。また、子どもたちは銀色の目のネズミを「駆除することで大人に認められよう」としたのではないので、力は本文と合わない。

㊦ 出典は、茂木健一郎・矢内理絵子『女脳 ひらめきと勝負強さの秘密』。

問二 まず、何が「魔法のように働く」力だというのか、主語をはっきりさせること。ここで話題になっているのは「直感やひらめき」である。つまり、「直感やひらめき」は「魔法のように働く」力だ、というのである。だから、「直感やひらめきは、自分では意識的には思い出せない記憶」というのと食い違うイや、「以前に経験していたり、一度ならず考えることがあったり、または似たような体験がある、それらを……必要なときにふと思い出せる種類の記憶」というのと矛盾するア・エは間違いで、合っているのはウということになる。

問三 ——線部の四つ後ろの段落で、「たくさんの引き出しから、正しいタイミングで正しい答えを取り出す能力が、『直感』や『ひらめき』です」と述べていることに注意すること。第三段落では、直感やひらめきとは「自分の経験や鍛錬や体験によって蓄積されたデータを引き出せる力」だと言っているのだから、これらから考えて、「引き出し」とはつまり、直感やひらめきによって取り出す（引き出す）「自分の経験や鍛錬や体験によって蓄積されたデータ」のことである。

問四 文章の末尾で「これこそが、正しい直感やひらめきを鍛える基礎だと思います」と述べている。だから、「これ」が指していること、つまり、この直前の文に書かれていることによって直感やひらめきは鍛えられるといえる。